

龍谷大学蔵大谷文書5467号の『本草集注』

猪飼 祥夫

北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室

大谷文書5467号の『本草集注』は、このたび大谷文書目録作成中に発見した断片である。『本草集注』は陶弘景(452-536)によって500年ごろに編纂された本草書である。この書の原則は、『神農本草』の本経を朱字で書写し、『別録』の文と注を墨字で書き分けたことである。『新修本草』も同様であった。宋代になって本草書が印刷されると本経は黒地に白字であらわされ、その他の注記や増補の文は墨字で印刷された。

5467号文書は、『大谷文書集成』参に「医薬関係文書断片」と命名されているものである。『本草集注』の断片は5467-1のA面の資料である。

無毒主

摩之又治淋

澤(衣中乃有取, 小兒淋閉取)

寒(大寒)

この文章は、『本草集注』の衣魚と白頸蚯蚓の項目に対応する。文献は朱字と墨字と混合して書かれ、「無毒主」は朱字である。「摩之」も朱字である。「又治淋」は墨字である。「澤」は墨字である。細字は注の文である。注の「衣中乃有取」「小兒淋閉取」は細字二行であり、前後に文が続く。本文の「寒」は朱字である。注の「大」「寒」も細字二行に書かれている。森立之らの重輯『本草経集注』によれば以下の所に相当する。

「衣魚, 味鹹温無毒, 主婦人疝瘕, 小便不利, 小兒中風, 項強, 背起, 摩之。又療淋, 墮胎, 塗瘡滅癩, 一名白魚, 一名蟬。生咸陽平澤, (衣中乃有, 而不可常得, 多在書中, 亦可用。小兒淋閉, 以摩臍及小腹, 即溺通也。)

白頸蚯蚓, 味鹹寒, 大寒, 無毒, 主蛇瘕, 去三蟲, 伏尸, 鬼疰, 蠱毒, 殺長蟲, 仍自化作水, 療傷寒伏熱, 狂謬, 大腹, 黃疸。一名土龍, 生平土。三月取陰乾。(注略)」

この文献は『新修本草』とほとんど同文である。後世伝来の『重修政和經史証類備用本草』(以下略称『証類本草』)などと比べてみると、これは『本草集注』であると考えられる。その理由は、唐の高宗李治の避諱である「治」が避けられていないことである。後世の唐の『新修本草』では「治」は「療」と書きなおされている。真柳は、先の『本草集注』の「序録」では「治」の避諱が必ずしも文献書写の年代決定に影響しないと述べている。しかしこの文献では『本草集注』の原書の「治」が使われていることから、『本草集注』の断片であると確定できる。

また「無毒」を森立之は『別録』の文とするが、『証類本草』などは白字で本経とする。この資料に寄れば、「無毒」は朱字であるので、本経である。ベルリン国立図書館プロイセン文化財東方学部門の所蔵される吐魯番出土の『本草集注』断簡(Ch1036r)は朱字で本経、墨字で『別録』と注が書かれている。この断簡では「有毒」が墨字で書かれている。このベルリンの文献を研究した渡邊に「有毒」「無毒」が本文か否かについて論説がある。注の「衣中乃有取」は、「取」が後世では「而」とあるが、文章的には「取」のほうが良いように思う。

「寒」は朱字で書かれているので白頸蚯蚓の本文である。しかし墨字の「大」「寒」は朱字より小さく二行に並ぶので、注と考えられる。ならばこれに続くはずである白頸蚯蚓の「無毒」も本経の可能性があるとおもわれる。小曾戸洋氏からこの文献はベルリンの『本草集注』の僚本であるとの指摘を受けた。「有」「取」「兒」などの字に共通性が認められ、断片とベルリンの断簡は近いところにある。